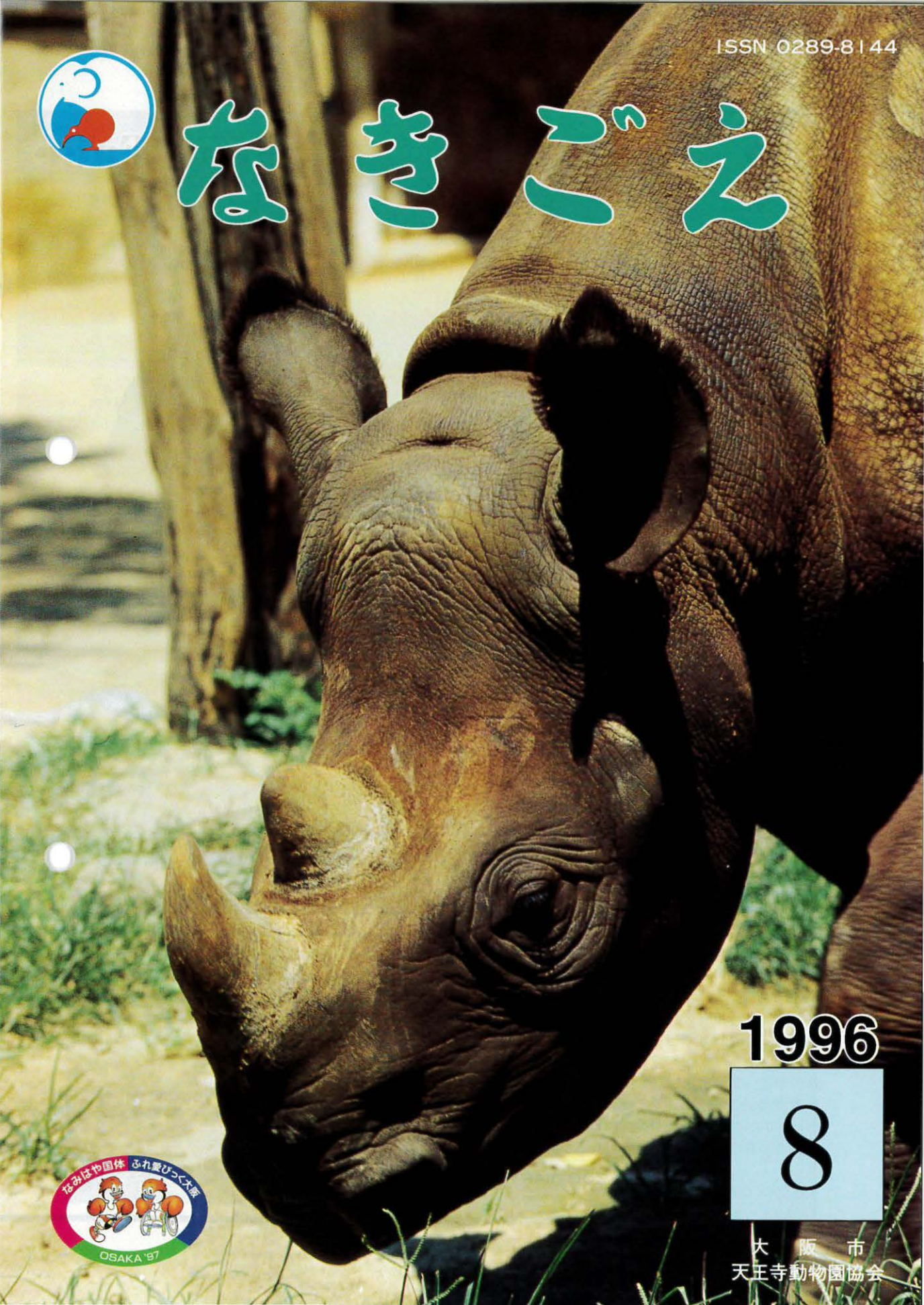
ISSN 0289-8144

なきごえ



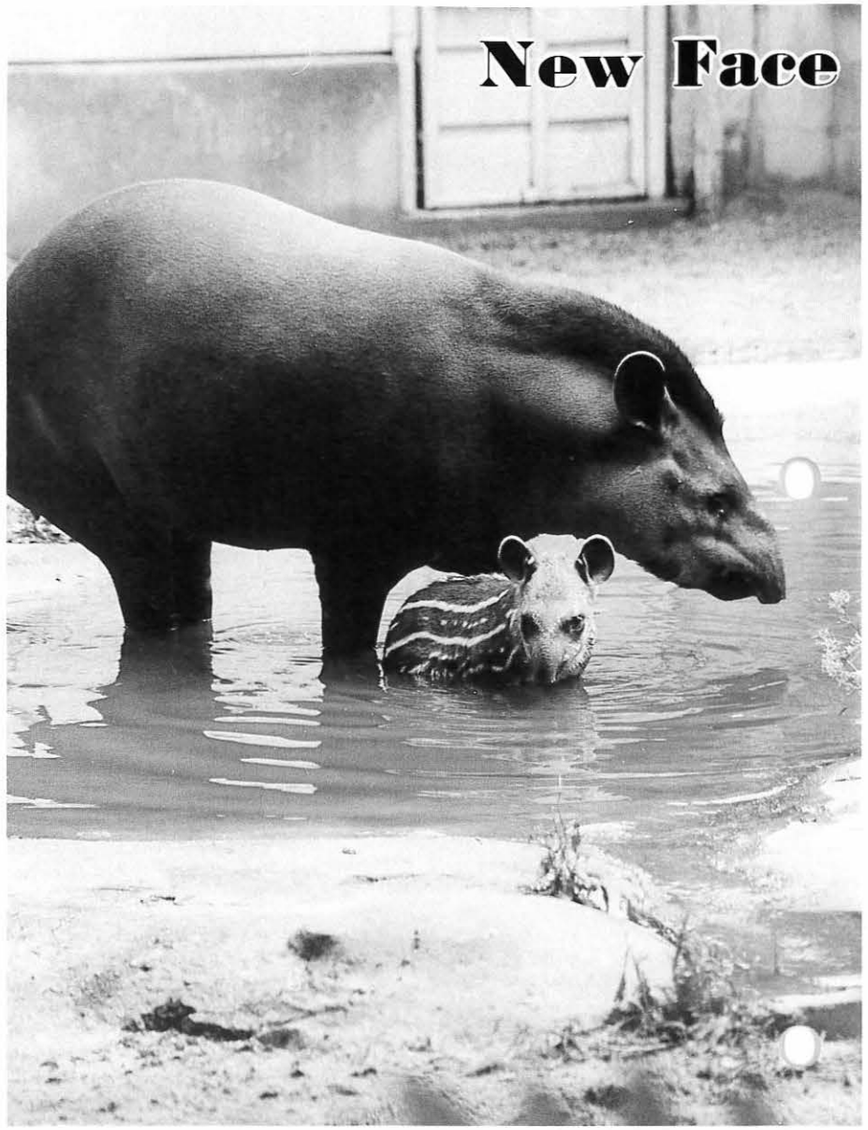
1996

8

大阪市
天王寺動物園協会

なみはや国体 ふれ愛びっく大阪
OSAKA '97

なきごえ
8
1996



（撮影：中山 正幸）

2 —— New Face ブラジルバクの赤ちゃん今日は（中山正幸）
3 —— 動物と私 アニマル・セラピー（川本典美）
カバーウォッチング クロサイ（高橋雅之）
4 —— 屋久島の「自然な」サルと「不自然な」サル（杉浦秀樹）
6 —— 最近の保護動物あれこれ（森本委利）
8 —— グラフZOO 清楚な花たち （村上勇一）
10 —— キーパーズアイ（土谷正道）
11 —— ZOO DIARY

カバーウォッチング

クロサイ
ウマ目 サイ科

Diceros bicornis

サハラ以南の南・東アフリカに分布していたが、現在では絶滅した地域もあり、野性個体は約2,500頭と推定されています。1994年当園では日本で最初の三世が誕生しました。

（撮影：高橋雅之）

動物と私

アニマル・セラピー

川本典美さん
（福祉施設職員）

私の仕事は、保育園の園長さんのような仕事です。「ような」というのは、私のところに集まってきてくれているのは、平均年齢84歳の人たちだからです。正確には、保育園ではなく、デイサービスセンターと呼ばれる高齢者福祉施設です。ここでは、お年寄りにお風呂に入ってもらったり、お昼ご飯を食べたり、友達とおしゃべりしたり、遊んだりして楽しい時間を過ごしていただいています。

仕事柄、私はいろんなお年寄りの方の生活をかいま見ることができます。一人暮らしの人、夫婦二人だけの人、子供夫婦と暮らしている人。みんなそれぞれ違う生活をされているのですが、あえて共通の悩みをあげるとするとそれはなんだと思いますか？

それは、じっくりと自分の話を聞いてくれる話し相手がみつかりにくいことです。家族と一緒に生活されていても、生活の時間帯が違ったり、興味の対象が違ったり、また、耳が年齢とともに聞こえにくくなったりして、なかなか自分にぴったりの話し相手をみつけるのは難しいようです。話し相手がいないとおしゃべりをしなくなり、考えることをしなくなったり、声を使うことをしなくなったりして、身体の健康に影響を及ぼします。さらに、そればかりでなく、ひとり取り残されたような気分を味わって孤独を感じるようになり、心の健康にも大きな影響を及ぼすのです。

さて、そんな中、大活躍をしてくれているのが「ペット」くんたちです。「ゲンちゃん」「リキ」「たあ坊」「くろ」「しろ」「ミーコ」…。みんな、散歩の友、テレビの友、食事の友、昼寝の友、そしておしゃべりの友として、なくてはならない地位を築いています。また、若い職員さんたちとの共通の話題づくりにも貢献してくれています。

最近では、特別養護老人ホームと呼ばれる施設でも、犬や猫、うさぎ、鳥といったペットを飼うところが増えてきました。ホームに生活するお年寄りたちは、むかし自分が飼っていた犬を思い出して声をかけたり、食事や散歩の世話を楽しみにするようになります。私の知り合いのホームでも犬や猫を飼いはじめ、そこの園長さんは「ホーム内の雰囲気が明るくなった。これまでは世話される一方だったお年寄りが動物の世話をすることで自分が誰かの役に立っているという自信や喜びにつながっているみたいだ。それに、心細いときに動物と一緒にいることで不安感が薄れて気持ちがやすらぐ効果もあるみたい。」と話しています。

実際に、最近では動物とふれあうことが体や心の健康を害しているお年寄りによいリハビリ効果があることが科学的に研究され、アニマル・セラピー（動物療法）と呼ばれてとても注目されています。残念ながら、私のデイサービスセンターでは、動物を飼っていませんが、去年の秋のメインイベント「遠足」では、天王寺動物園を訪れました。楽しい時間を過ごしたことはいうまでもありません。今から、今年の秋の遠足が楽しみです。

（かわもと のりみ）

ブラジルバクの赤ちゃん今日は ウマ目 ハグ科

6月14日、ブラジルバクの赤ちゃんが誕生しました。体のたてじま模様はイノシシの赤ちゃん“ウリ坊”にそっくり。6月27日から一般公開しています。

屋久島の「自然な」サルと「不自然な」サル

杉浦秀樹
京都大学霊長類研究所
日本学術振興会特別研究員

§屋久島の自然

屋久島は九州・鹿児島のさらに南にある島です。島といってもかなり大きくて、大阪市の面積の2.3倍の広さがあります。島の中央部にはけわしい山が連なり、九州で最も高い山も実はこの島にあります。けわしい山が簡単には人を寄せ付けなかったために、この島には貴重な自然が今でもたくさん残っています。しかし同時にここは現在も1万3千人の人が生活している島であり、人々は昔も今もさまざまな形で自然と関わりながら生きています。屋久島の山をよく見ると、決して全部が原生林ではなく、農地や植林地があちこちにあることに気付きます。また最近は急速に観光化が進んで、1年に訪れる観光客の数は島の人口の十数倍にまで達しています。屋久島には確かに、

屋久島の原生林

人がほとんど関わることのなかった原生の自然が残っています。しかし同時に、人と接触しながら存在している自然もたくさんあり、そういった自然とどのように付き合っていくかということも現在の大きな問題です。

§「自然な」サルと「不自然な」サル

私は屋久島でヤクシマザルの研究をしています。ヤクシマザルはニホンザルの亜種で、本土のニホンザルと比べると毛が黒っぽく、体も少し小さめです。屋久島には、人とは関わらず山の中で暮らしている「自然な」サルがたくさんいますが、一方で観光客からたくさんの餌をもらいながら生きている、「不自然な」サルもいます。さらにもう一つ、農地の近くにすみ農作物に被害を与えている「猿害ザル」というのもいて、これもたいへん大きな問題です。ただ、この「猿害ザル」の話はこれだけでとても大きな話なのでここでは書きません。興味のある方は「サルが山からおりてきた」(佐藤一美著、ポプラ社1994年)という本を読まれることをお勧めします。

私が観察している自然な状態のサルは、屋久島の海岸に近い森の中で暮らしています。私の見ている群れは全部で24頭の群れで、屋久島では平均的な大きさです。この群れはだいたい0.8平方キロほどの遊動域(なわばり)を持っています。ある木の実を食べたらまた次の木へ行き、そこで食べるということを繰り返すのが、彼らの生活です。途中で休んだり、毛づくろいをしたりもします。一日に移動する距離は、500mから1000m位になります。食べるものはさまざまで、季節によっても変わります。一番多いのは果実です。ごく一部のものだけをあげると、マメガキ(柿)、シマサルナシ(キーウィにごく近い)、ヤマモモ、キイチゴの仲間、イチジクの仲間などがあります。どんぐりもよく食べます。虫も大好きです。夏になって虫が出てくるようになると、真剣になって捕まえようとします。セミ、バッタ、カブトムシ、ムカデ、クモ、いろいろなものを捕まえてはあっという間に食べてしまいます。果実や木の実のない時期には、木の葉もよく食べます。他にも、花やきのこなどいろいろなものを食べます。サルは森の中のどこにどんな食べ物があるかとてもよく知っているようです。そういった森の知識に関しては私なんかはとうていサルにかないません。

「自然な」サル

これらの食べ物はすべて森の中にあるものです。人が何かを食べていても興味を示しません。彼らはこちらが近づきすぎない限り、人間の観察者を無視しています。彼らは自分たちの力で生きており、人にこびることなく毅然として生きているのです。

一方で屋久島には観光客から餌をもらうことを覚えて、人を全く恐れなくなったサルもいます。このサル達は、道端に出ては車で通りかかる人達から餌をもらっています。彼らは、スナック菓子、パン、あめ、ミカン、パッションフルーツ、ピーナッツなど、人が食べるものならたいていなんでも食べます。自動車が止まると寄ってきてボンネットに乗ったり、窓の隙間から手を入れたりして餌をねだります。後ろ足だけで立ち上がって餌をねだるサルまでいます。人をほとんど恐れないので、「こらっ」と言って怒るとサルの方も同じように怒ってこちらを威嚇してきます。これほどまでに人間に依存し、人にこびるようになったサルを見ていると本当に情けない気持ちになってしまいます。

餌付いて人を恐れないサル

この「不自然な」サルたちを、当時鹿児島大学の大学院生だった大久保さんという方が詳しく調べています。それによると彼らの遊動域はほとんど道路の周りだけで、広さも私たちの見ている自然な群れの5分の1位しかありませんでした。つまり、このサル達は食べ物を探して森の中を動くことはあまりせずに、道路に長い時間いて、機会があれば観光客から餌をもらおうとしているのです。観光客の方も無責任に餌を与えるので、サルもますます餌の味を覚え、道路から離れなくなるという悪循環が起こっています。最近では道路に「サルに餌を与えないでください」という看板が立つようになりました。しかしそれを無視して餌をやる人は相変わらずいます。この二つのサルの生活を比べると、人間のやる餌によってサルの行動がどれほど変わってしまうかよく分かります。人に対する態度が変わるだけではありません。森の中で餌を取ることをあまりしなくなり、人からもらう餌にたよるようになります。そして餌をもらうことを覚えてしまったら、それをやめさせることはとても難しいのです。

§野生動物との付き合いかた

これとは逆に、こんなこともありました。私が道路の近くで野生のサルを観察していたときです。サルのいるところで1台の車が止まって、中年の男の人が車からおりました。そうしていきなりサルに向かってすごい勢いで石を投げつけ始めました。サルはびっくりして逃げ出しましたが、私も突然のことであっけに取られてしまいました。島の中には、農作物を荒らされるのでサルを見たら石を投げることにしているという人も確かにいます。その場所は周りに畑などは全くない場所で、そこのサル達に石を投げても畑荒らしを防ぐことにはならないのですが、その人はとにかくサルを見つけたら石を投げているのかもしれません。

いったい動物に石を投げて脅かすことと、餌を与えることとでは、どちらが悪いことなのでしょう。これは相手が野生動物なのか、ペットなのかで答えは全く違ってきます。ペットには餌をきちんとやらなければいけませんし、脅かしていじめるようなことは良くないことです。しかし野生動物に餌をやることは、脅かすよりもずっと悪いことだと思います。(もちろん一番いいのは、驚かさないようにそっと見ることですが。)サルを脅かせば、彼らは人への警戒心を少し強めるでしょうが、そもそも野生のサルが人を警戒することはごく自然なことです。ところがサルに餌を与えてしまうと、彼らのもともとの生活を大きく変えてしまいます。餌をもらえればおサルさん達も喜ぶし、動物がそれで死ぬわけじゃないからいいじゃないかと思うかもしれません。しかし生きてさえいければ、その動物本来の生活ができなくても構わないというのは、野生動物を大切にしていることにはなりません。野生動物が本来生活している場所で、本来の生活ができるようにしてやって初めて、野生動物を大切にしているといえるのではないでしょうか。野生動物に無責任に餌をやることは、野生動物のもともとの生活を壊しているという意味で、一種の自然破壊だと思います。

野生動物の愛護とはお腹のすいている動物に餌を与えることではありません。野生動物の愛護とは、彼らの生きている世界そのものを大事にしてやること、つまり動物の生きて行ける森や野原といった生息地そのものを大事にすることです。

§終わりに

さて、話が少し変わりますが、動物園にいくと動物に餌をやっているお客さんを必ず見かけます。檻の前に「動物がお腹をこわすので餌をやらないでください」と書いてあっても、無視してお菓子をあげています。こうした人を見るたびに、野生のサルに餌を与えてしまう人の姿がつい重なってしまいます。

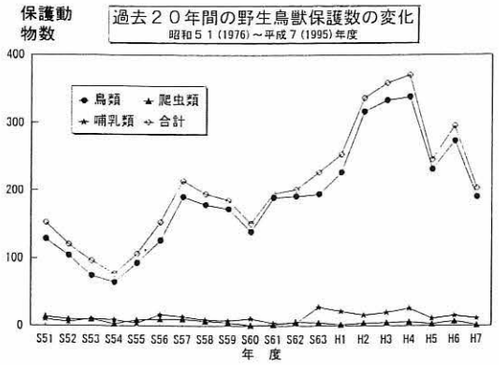
私は動物園に来ることによって、その動物が野生ではどんな風に生きているかも学ぶことができたら素晴らしいと思います。もちろん口で言うほど簡単なことではないでしょう。展示方法を工夫して、動物を飼う場所をもっと自然な状態に近づけることも必要でしょうし、その動物のことを良く知っていて解説できる人も必要でしょう。これはお金も手間もかかる大変なことです。でももしそれが実現できれば、動物園の動物自身ももっと幸せでしょうし、野生の動物を守っていくことにもつながると思います。そして訪れる人も野生動物のことを知り、野生動物との付き合いかたについて考えるきっかけになるかもしれません。

(すぎうら　ひでき)

最近の保護動物あれこれ

§平成になり、保護数はウナギのぼり

鳥獣保護思想の普及、啓発が行き届いてきたのでしょうか、平成に入ってからの保護動物数の上昇は目をみはるものがあります。グラフからもわかりますが、89（平成元）年度と90（平成２）年度の差は実に85です。そのあと２年間にわたりさらに上昇が続きました。最高に達した92（平成４）年度では、保護総数371となり、一日平均１個体を保護している計算となりました。この上昇の原因として、幼鳥の保護の伸びが大きく影響しているようです。



§保護数急下降

93（平成５）年度は保護数の減少が著しく、これまでの保護数の最高を記録したその前年度から124も減少しています。この年度は幼鳥の保護数がたいへん少なくなっています。93年は冷夏であり、鳥の繁殖に少なからず影響を与えたようにも思われますが、95（平成７）年度もさらに減少がみられていますから、詳細はよく分析してみないと分かりません。

§失われる緑

環境庁がまとめた緑の国勢調査（自然環境保全基礎調査）によると、1983年から86年まで実施した調査と90年から92年まで実施した調査を比較したところ、約10年間に開発などで、全国の自然林の約１％にあたる72,700ヘクタールが消滅し、そのかわり、市街地・造成地、農地などが増えていました。また、自然林に近い二次林も18万ヘクタールが失われて、植林地などに移行していました。野生の動物たちの住みかとなる緑は、今も着実に失われつつあり、これが原因で都会へ進出するものも現れました。

§都会派のタカ

緑減少の影響が、野生鳥獣の実態に如実にあらわれつつあるようです。環境庁がだしている「日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー」に、危急種（絶滅の危険が増大している種）とされているオオタカやハヤブサの仲間は、都会に進出しつつあります。今年はじめ、大阪市内で建物にぶつかって保護されたオオタカは、生息地の開発で不足がちな餌を都会のドバトに求めてやってきたものです。同様の例は京都市でもみられ、93年からドバトを捕食するため、京都御苑にオオタカが飛来するようになっています。

今年、市内で保護されたオオタカの若鳥

このような現象は米国の絶滅にひんするハヤブサにもみられ、ニューヨークのウォール街では、ドバトをエサにして、12組のつがいが生息、摩天楼の高層ビル群のなかで繁殖しているといいます。もともと、ハヤブサは、切り立った崖で巣作りをしますが、ビルの状況が、自然の繁殖地に似ているためこのような都会での繁殖にいたったのです。またハヤブサの仲間、チョウゲンボウも近年大都市のビルのくぼみや鉄橋の桁で繁殖しているということです。

タカ類の保護は、76（昭和51）年度から88（昭和63）年度まではトビ、サシバが主体で、種数も83年度の５種が最高、平均２～３種と少数なのに対し、89（平成元）年度からの種数は、その約２倍の平均４～５種。多いときで７種が保護されています。とくに、トビは88年度までは年間３～４羽、多いときは10羽も保護しましたが、それ以降は２羽くらいが平均となり以前の約1／2の保護数となっています。見たところオオタカについては、88年度までは、多くても１年に１羽しか保護しなかったのが、それ以降は、ない年度もありますが、２～３羽も保護されるようになっています。ハヤブサは、88年度まで12年間に保護された総数はわずかに１羽であったのが、平成にはいって一昨年、昨年と一羽ずつ保護され７年間に２羽保護されています。都会でもハヤブサの飛翔が確認されていることから、今後さらにこの種の保護がつづくものと思われます。

§タヌキの保護増加

平成になるまでは、年間３頭くらいの保護しかなかったのですが、平成になり保護数は平均10頭、89（平成元）年度には、12頭も保護しました。そのほとんどは、そのケガの状況（足や骨盤、脊椎の骨折や保護場所が道路）から交通事故と思われます。93年10月の新聞記事には、近畿の高速道路だけで、年間550頭のタヌキが犠牲になっているとでていました。高速道路は、野生の動物たちの「けもの道」を寸断して建設されているために、いつものルートをタヌキたちが強引に通ろうとすることからこのような悲劇がおきてしまうのです。タヌキは驚くと立ちすくんでしまうフリージング（擬死）という習性（タヌキ寝入りもここからきている）があるため、おもに夜活動するタヌキは、車のライトに驚いてひかれてしまうのだろうと考えられます。日本道路公団は、道路内に入れないようにフェンスを張るなどの対策にのりだしたらしいのですが、「けもの道」を寸断しないように、道路下にトンネルを設けておくことが大切だと思われます。愛媛県上浮穴郡柳谷村は、自然公園に新設された道路の下に、今年トンネル式のけもの道をつくり、タヌキやウサギなどの小動物が生息域を分割されないようにしたのだそうで、建設省によると、市町村でこのようなけもの道をつくるのはたいへん珍しいのだそうです。近頃は、少しずつではありますが、地方でも野生動物にたいするこのような配慮がなされるようになってきていることは喜ばしいことです。

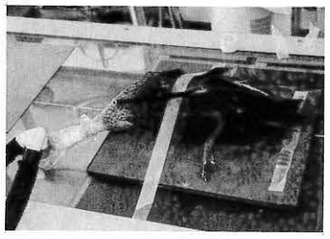
交通事故で保護されたタヌキ

§フクロウの仲間の保護

この19年間に保護したフクロウ類は、フクロウ、アオバズク、オオコノハズク、コノハズク、コミミズク、トラフズク６種のみで、この内フクロウ、オオコノハズクのみ留鳥でそのほかは渡り鳥です。保護の多くは、フクロウと青葉の季節に南方からやってくるアオバズクで占められます。ところが昭和期はアオバズクの保護がフクロウの２倍でしたが、平成になり逆転しつつあります。アオバズクの保護は例年なみなのに対し、フクロウの保護の絶対数が増えつつある状態で、このところ年に５～６羽保護しています。保護原因は、負傷で翼の骨折が多く、栄養不良等による衰弱や幼鳥ということでも多く持ち込まれます。

§矢ガモ

心ない人が、おもしろ半分に野鳥をねらうのでしょうか、矢が体に刺さったカモ「矢ガモ」騒動は、東京での捕獲騒動を皮切りに、大阪でもすでに２件ありました。最近では今年２月末、堺市の石津川でみつかったカルガモで、ボウガンの矢が背中からわき腹にかけて刺さっていました。３月13日の２回目の大阪府職員７名による川での約１時間半にわたる救出作業で無事保護されました。捕獲されたカモは本当に幸運でした。昨年、神戸の須磨海岸で見つかったカモメは飛んで逃げていってしまったということですから、助からなかったかもしれませんが、当園に持ち込まれたこの矢ガモは、体から矢を除かれた治療によりみるみる元気を取り戻し、自然に戻っていきました。


矢のささったカルガモ。X線撮影中

§ワシントン条約の規制で摘発された動物

日本産野生動物ではありませんが、このところ、ワシントン条約で輸出入が規制されている動物が、海外から空港に密輸入されようとして摘発され、当園に預かりとして飼育されるケースが増えつつあります。大阪税関によれば、関西空港開港以降、動植物の密輸が増加し、伊丹空港時代の93年に２件（数量は270）だった摘発件数が、95年は８件（同587）に上っているといいます。また、警察はペット販売業者の摘発にも積極的にのりだしつつあります。当園ではすでに、アルダブラゾウガメ、インドホシガメ、アントンガエル（通称トマトガエル）、キイロオオトカゲなどを預かりました。

§これからの野生鳥獣保護

野生鳥獣で最も手間のかかるのが飼育管理で、治療中の動物は当然ながら、とくにヒナはエサを頻繁にやらなければなりません。エサのやり方しだいでその生死が決まります。大阪府は野生鳥獣救護ドクター制度を平成４年からスタートさせましたが、ほとんどのドクターは１次治療をするだけにとどまり、その後の治療かつ飼育管理を当園へ委託してきます。また府内約10個所の大阪府から委託をうけている野鳥救護施設は、フクロウなどの猛禽、タヌキ等の動物は危険で扱えないため、当園にまわされます。動物園は、野生動物保護を一部で担う施設ではありますが、主は動物園動物を扱う施設のため保護動物だけに全力投入することはできません。そこで大阪府は、幼鳥飼育も含む傷病鳥獣の拠点施設となる鳥獣保護センターを早急に設置すべきでしょう。また、東京など十数都県ですでに導入されている民間ボランティアを活用し、飼育委託を広く呼びかけ、草の根的な保護活動を展開していく必要があるものと考えます。

エサをせがむムクドリのヒナたち

（飼育課：森本委利）

なきごえ32(8).1996

グラフZOO

清楚な花たち

爬虫類生態館へのプロローグ

春から初夏にかけて生態館入口までの観客通路際に咲きました(4月～7月)。

ホタルブクロ

キキョウ科の多年草で、日本全土、また東アジア山野に分布しています。白から淡紫色の鐘形の花が下向きに開きました。

アヤメ科の花

山野に自生する多年草で庭園でもよく見かけられます。変種が多くあります。

ハギ科の花

マメ科ハギ属の落葉低木で、花冠は蝶が舞っているよう。紅紫色または白色で、ときには黄色を帯びます。

ギボウシ

ユリ科の多年草で、初夏に花茎を伸ばします、淡紫色の可憐な花がかわいいですね。

爬虫類生態館 アイファー

入口左側に広がる前庭のような植林地にはいろいろな花が咲き入園者の目を楽しませてくれます。

ガクアジサイ

関東より南の太平洋の山地に生える落葉低木です。アジサイの母種ですからよく似ていますね。

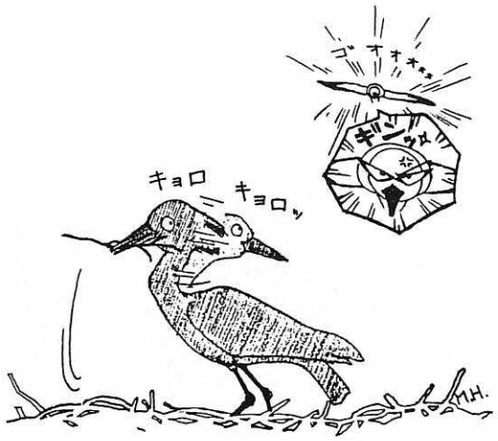
ユキノシタ

ユキノシタ科の多年草で全草に長い白毛があり、細かい枝を出し食べることも出来ます。また薬用にも用いられています。

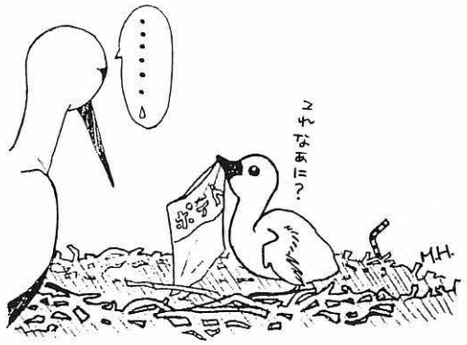
キーパーズアイ

ちょっと巣材を失敬

鳥類の巣作りにはいろいろな場所や方法があります。木の枝や岩場そしてほら穴などいろんな場所で小枝や枯葉、枯草、羽毛などをうまくあんだり、土を固めたり、また軽く土を掘っただけですませたりと自然界では実に多種多様な巣作りをし、卵を産み、これを温め、ヒナを孵化して子供を育てます。



さて当園のバードケージではコウノトリ、サギ、ガン、カモの仲間を中心に飼育展示していますが、春ともなると、それぞれ特徴のある巣作りを開始します。この中にシュモクドリという鳥がいます。別名はハンマーヘッドといい、頭の後にある羽根を立てるとハンマーのような姿になります。ハンマーのような姿になって大工仕事をするわけではないのですが、この鳥、自分の体の大きさからは想像も出来ないほどの大きな巣を作ります。体長は30～40cmなのに作る巣はなんと　直径1～1.5mあり、その形はドーム型で、中央付近に自分たちだけの小さな出入り口を作るなどさすがにハンマーを使った作品か？（冗談です）とでもいうような代物です。この巣がまた頑丈で、繁殖シーズンが終わって巣を撤去しようと人が巣の上に乗ってもびくともしませんし、組あわせた小枝は簡単には抜けません。だから他の鳥がハンマーヘッドの巣から小枝などの巣材をちょっと拝借しようとしたとしても抜けるものではありません。ところがハンマーヘッドは、多量の巣材が必要な自分の大きな巣のために、あつかましく他の鳥の巣からも巣材を失敬するのです。手頃なものがシュバシコウ（ヨーロッパコウノトリ）の巣材のようで、シュバシコウがせっせと作った巣を離れている間にハンマーヘッドは素早く失敬しては自分の巣作りに励むのでした。



廃材利用

一方、失敬されているシュバシコウはどうでしょうか。ある日、シュバシコウの巣がオレンジ色をしていました。変だなと目を凝らすとそれはビニール袋でした。バードケージの掃除のとき、落葉などのゴミを入れるビニール袋を何か所かに置いて作業をするのですが、これを巣材として持っていったようです。巣の中を見てみると、そのほかにお菓子の袋や発泡スチロールのカップ、ストローなど色とりどりのゴミも巣材となっていました。シュバシコウは巣材を失敬される一方で廃材を見つけては、これを利用し、涙ぐましく繁殖に励んでいるのでした。

（土谷正道）

今月もおもしろ情報満載 ZOO DIARY

6月1日 ヒツジの毛刈りを行いました。これは、衣がえの季節に合わせて毎年6月1日に行っているものです。毛刈りバサミや電気バリカンを使って、合計7頭のヒツジの毛を刈りました。

6／2. アカショウビンとハシボソガラスを各1羽保護しました。

6／3. 爬虫類生態館“アイファー”でトゲスッポン7頭を展示しました。
　ダチョウが産卵しました。今季2卵目です。

6／5. ライオンの赤ちゃんが生まれました。母親を安心させるため、頭数の確認は後日する予定です。

6／6. オシドリ6羽、カンムリウズラ1羽、オナガキジ1羽がふ化しました。

6／8. 今季5頭目のニホンジカが生まれました。
　ツバメを1羽保護しました。

6月10日 今月初旬から食欲不振の続いていたアムールトラのオスの検査を行いました。レントゲン検査と胃カメラ検査で毛球による食道炎とわかり、根本治療を始めました。

6／11. ムクドリの幼鳥を1羽保護しました。

6月12日 昨年7月に生まれ、人工哺育を続けていたドリル“ドリー”の屋外展示の練習を始めました。まだ、展示場に慣れていないため、小さな檻に入れた状態で展示しています。

6／13. 5月に保護したドバト2羽、ハシボソガラス2羽、ムクドリ12羽が元気になったので放鳥しました。

6／14. ブラジルバクの赤ちゃんが1頭生まれました。

6／17. 今季8頭目のニホンザルが生まれました。
　サバンナモンキーのオスの元気がなくなったので、動物病院に収容し検査・治療を始めました。

6／18. “鳥の楽園”でツクシガモが3羽自然ふ化しました。

6／19. スズメとドバト各1羽を保護しました。

6／20. ドリルの“ドリー”が下痢を起こしたので、治療を始めました。
　ハシボソミズナギドリを1羽保護しました。

6／21. ニジキジが2羽ふ化しました。

6／22. アカカンガルーの赤ちゃんが誤って育仔袋から落ちているのを発見したので、すぐに母親の袋に戻しました。

6／23. ヒヨドリの幼鳥を1羽保護しました。

6月25日 “鳥の楽園”で5月にふ化したシュバシコウ（ヨーロッパコウノトリ）のヒナに個体識別のため足環を付けました。

6月26日 （社）大阪市天王寺動物園協会の平成8年度総会が開催され、磯村新会長の挨拶の後、各議案について審議され、原案どおり満場一致で承認されました。今回は役員改選の年ということで、副会長に阪口助役夫人が、理事の宮崎前本部長の後任に、北山本部長が、大信アイスの佐野理事の後任に、富士写真フイルムの那須氏が、それぞれ新たに就任することが決まりました。

今季5頭目のニホンジカが生まれました。

6月27日 6月14日に生まれたブラジルバクの赤ちゃんの一般公開を始めました。当園での繁殖は7回目ですが、母親“アサミ”にとっては初産でした。

6／28. 今年の4月1日に生まれ、人工哺育していたアムールトラの赤ちゃんを北海道旭川市の旭山動物園に贈りました。

■お知らせ■

●動物園のおじさんのお話
「アシカのガイド」
日時：8月18日(日)　午後1時～
場所：アシカ池

愛ある暮し、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

新・きれい色

FUJICOLOR

SUPER G ACE 400

カメラの大林

桜橋本店　☎341—8091

阪急三番街店　☎372—5031

DEAR LIFE BOOKS

生態・飼育・図鑑が一つの本の中にギッシリ

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？　動物園での世話の仕方は？　仲間は？　など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしとかいかたシリーズ＜既刊本＞

B5変型判・オールカラー

むし くらしとかいかた

野山でみかける身近な昆虫たち250種を紹介。

ちいさないきもの くらしとかいかた

昆虫以外の小さな生き物を320種紹介。

お求めは、お近くの書店で。　ひかりのくに株式会社　本社／〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

ニホンオオカミの生態と歴史の集大成

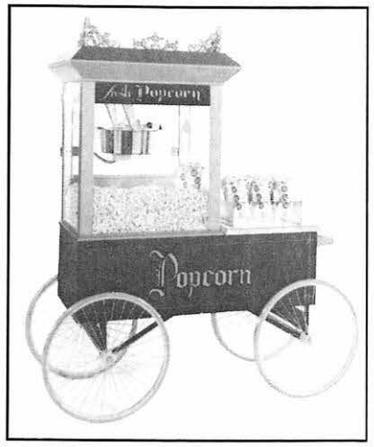
狼——その生態と歴史——

平岩米吉［著］　A５判　308頁　定価2,678円（税込）

ニホンオオカミは今もどこかで生きのびているのか——。
狼と生活をともにした実体験を基盤に、
数十年にわたり収集した正確な資料と生態学の眼をもって、
ニホンオオカミの特徴や大きさ、性質などを分析。
今も根強く残っている残存説を検証するとともに、
絶滅へといたる歴史をも詳述する「ニホンオオカミの正史」。

㈱築地書館　〒104　東京都中央区築地2-10-12　TEL 03-3542-3731　FAX 03-3541-5799　振替 00110-5-19057

◉ご注文は、最寄りの書店または直接上記宛先まで。（直接郵送時の発送料は一律400円です。）



マスダのポップコーン

マスダ　いつでも どこでも ポン ポン ポン

〈営業品目〉　製造機械・保温機　他
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

㈱増田食品　〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30　TEL (06)865－0165

新作

貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」

19分（10本常備）

- 対　　象／保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間／10日間
- 貸 出 料／無料（但し郵送料510円は必要）
- 申 込 先／当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード（限定販売）
好評発売中 ¥800（50度用）

天王寺動物園の本

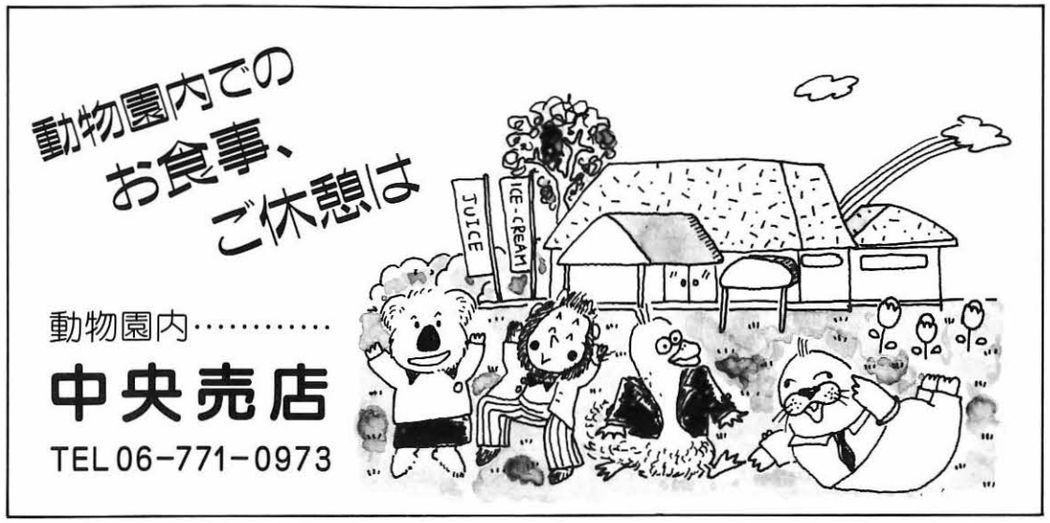
入園の記念・手引に……

オールカラー

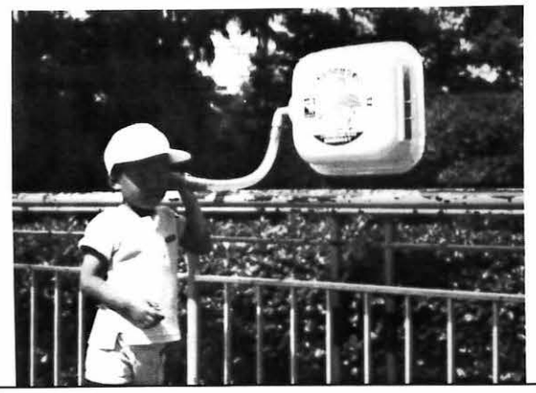
500円

園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201



たのしい〝動物のお話〟は、
ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回 30円

雪印

雪印
つぶより
フルーツ
ヨーグルト

●ライチミックス　●ストロベリー　●アップル　●ピーチ　●フルーツミックス

おいしさは、産地のよさです。

台湾のライチ、フィリピンのナタ・デ・ココとパイナップル――●ライチミックス
国産の女峰、オレゴンのトーテム、中南米のチャンドラー、季節の旬を追って――●ストロベリー
日本の富士、中国・韓国の国光。それぞれおいしい季節の――●アップル
桃といえば中国です。そして韓国。旬に一括収穫した白桃で――●ピーチ
アプリコット、メロン、アップル、パイナップル、ミカン。果物狂の――●フルーツミックス

お待たせ
新発売

希望小売価格・税抜 各100円

一日
愉快に
たのしめる

◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種〝のりもの〟があります。

久竹娯楽株式会社
TEL(06)541-3938(代)

なきごえ　1996年8月10日発行（毎月10日発行）第32巻　第8号　（通巻372号）

編　集／大阪市天王寺動植物公園事務所
発行人／大阪市天王寺動物園協会　伊東重朗
印刷所／株式会社 松村善進堂　定価150円(送料共)　1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6―74
電話 大阪 (06) 771―0201
振替口座 00930－2－37823

編集委員　樽本　勲／馬詰好文／増野悦敏／中川哲男／吉本昌俊／長谷川敏昭／落合正彦／宮下　実／榊原安昭／森本委利／高橋雅之／中上正幸／堀内智生／小林崇宏／竹田正人／高見一利／大野尊信／野口秀高／早川　篤／土谷正道／村上勇一／仁田原洋